



立教大学ふるさと支援隊

担当教員：空閑厚樹

代表：藤田知也

概要

1. 私たちが考える地域活性とは

2. 2012年度の活動

(ソフトボール大会・地域行事参加・広報・納涼祭)

3. 今後の課題

4.

1. 地域活性化＝地域が自立すること

ここでいう「地域の自立」とは？

そこに住む人々が自分の地域に目を向けること。行政任せではなく、地域の運営は地域民が主体となっていく。

例えば「普請」や「結」。これらは地域の社会基盤を地域住民自身が整えることで、そこには共同作業による住民同士のつながりがある。

なぜ、「自立」を考えたか？

私たち支援隊と一緒に活動させてもらうことで、地域に活気が出てきている。しかし、支援隊の継続の可能性を考えると、それは一時的なものではないのでは？

ならば、限られた期間の中で、地域の元気、活気が続く仕組みを考え、支援隊はそのきっかけになる必要がある。



2. 2012年度の活動



地域行事参加

昨年度に引き続き



広報



納涼祭復活

NEW!!

地域行事参加



広報

- ブログ: 週一更新中
- かわら版: 毎月発行 + 特別号 (納涼祭など)
現在第19号

【発行部数】

第1号と18号の比較



木呂子納涼カラオケ大会

始まり

元々は、子どもたちの遊び場をつくらうと、
川をせき止め、魚を放し、
つかみ取りをさせたのが始まり。
それが大人も楽しめるよう、
飲んで歌うようになった。



運営の若葉会

昔は20～40代が数十名いたが、
現在は50,60代が14名のみ。

そのため、運営の人手不足、特に若手
不足により納涼祭廃止(2009年)

2009～2011年の3年間行われてい
なかった。

ある時、
男子学生が高齢の住民男性と
歩いていると、すぐ横を子どもが
走り抜けていった。
男性は寂しそうにつぶやいた。
「昔と違って、今はどこの家の
子どもなのか、わからないなあ。」

(読売新聞 2013年1月8日地域面「むすんで拓け!『過疎地を立大生応援』」より)

65歳以上

50,60代

30,40代

10,20代

10歳以下

- 若い世代（特に30,40代）の地域に対する意識の希薄化
- それによる世代間のつながりの希薄化

なぜ納涼祭復活に携わったか？

地域の象徴ともいえる祭りを
運営できていないということは、
地域運営上、課題があることを表している。
現に若い世代が地域から離れていっている。



空間的な地域離れは

職業等の関係上やむおえない場合も…

しかし、木呂子に住んでいても若葉会に所属しない若い世代。さらには、高齢者と子どもをつながりも希薄化。

→意識の上での地域離れが課題！

納涼祭という地域コミュニティが

集う場の復活を通して、

若い世代の目を自分たちの地域に

向けさせることができると考えた。

そこで、

子ども会との共同企画

子どもたちに木呂子を好きになってもらおう！

- 「木呂子にあつたらなあ」と思うものを絵に描いてもらい、納涼祭にて発表。
- 木呂子の家庭に伝わる「冷汁(ひやじる)」の作り方を奥様方に学び、納涼祭にてふるまう。
- 替え歌「木呂子100%」をつくり、納涼祭にて発表。

(基にした歌は、アニメ「忍たま乱太郎」主題歌「勇気100%」)

若い世代に与えた影響



柴崎 智央 さん (しばさき ともひさ) 19才
若葉会会長さんの息子さん



2012/8/

事前準備



当日準備



復活!!

納涼祭を通して

子どもたちの参加は実現したが、

運営への30,40代の参加率は低いまま

しかし、会場には何名も見えている。

→子どもたちや高齢者の方々だけでなく、若い世代を主体的に惹き込むようなきっかけが必要！

3. 今後の課題

● 世代間交流

対象：10歳以下、10,20代

地域の良さや文化の発見を通して地域に目を向ける。

● 地域の運営

対象：30,40代(小中学生の親世代)

地域の運営を担う若い世代

を運営主体にどう巻き込んでいけるか？